難病と向き合ったから、知り得た事・・・

桔梗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
難病と向き合ったから、知り得た事・・・

【Ｎコード】
Ｎ４８２７ＢＡ

【作者名】
桔梗

【あらすじ】
ーいつものように、ごく普通の生活を送っていたコナン。
ある日突然、コナンに病魔が襲い掛かる・・・
未知不明の難病にかかってしまったコナン。みんなの思い・・・
様々な気持ちが交差する・・・。病気になりながらも笑うコナン。
恐怖の、余命宣告・・・いったいどうなってしまうのか！？

★病気の事は、現実ではないかも知れませんが・・・
そこは、無視でおねがいします。
第三作です！時間があったら、夕方提載するかも知れませんが、主に、１２：００提載か予約提載です。それでも、精一杯頑張りますので、よろしくお願いします♪

―1―　いつもの平和な日常（前書き）

どうも、桔梗です。活動報告通り、第三作　「難病と向き合ったから、知り得た事」記念すべき一話です。一様、たくさん、書いてあるので、今日もう一話見たい！という方は感想にお願いします♪限りあるので、一日にまとめて5話とかは無理ですが・・・毎日更新の予定ですが、全て夜中です。我儘な作者で変な所で段落が変わり読みにくいかもしれませんが・・・よろしくお願いします。

―１―　いつもの平和な日常

―　朝　ＡＭ　７：００　―

『・・・君・・コナン君朝よ、学校遅刻しちゃうよ・・起きて。』

いつものように、蘭の声で目覚めたコナンは布団から起き上がった。

「・・おはよ。蘭ねーちゃん。」

コナンは、まだ眠い目をこすりながら言った。

『コナン君、顔を洗ったら、ご飯作ったから食べてね。』

言い終わった蘭は、朝食のある食卓へと向かった。

しばらくするとコナンは、顔を洗い終わり自分の席へと着いた。

《いただきます！》

三人が、声を合わせて食事の挨拶をし、一斉に食べ始めた。

―　４０分後・・・　―

三人とも、食べ終わり蘭は全ての食器を片し、コナンは、学校の準備をしていた。
さらに、１０分経つと、哀と少年探偵団が探偵事務所に来た。
コナンは、彼らと一緒に学校に向かった。

『見たかよ！昨日のサッカーの試合・・』

『すごかったですよねー。』

『コナンも見たよな？』

『見たぜ！すごかったよな！』

コナンは、サッカーの事になると子供のようになる。いつものことだ。
それを見た哀は、クスッと笑った。それに気づいたコナンは、

「なに、笑ってんだよ・・」

コナンは哀を見て、言った。

『名探偵さんも、サッカーの事になると子供みたいね。』

哀は、からかうように言った。

「・・ほっとけ。」

いつもの会話をお互いにしていた。哀は、コナンには気づかれて

いないが少し、
うれしそうだった。

―そんな会話をしているうちに、学校に着きいつものように小学校生活を過ごしていた。

・・・この時は、誰も・・コナン自身も気づかなかった。コナンの身に、恐ろしい病魔が
襲い掛かってくるなんて・・・

―１―　いつもの平和な日常（後書き）

明日は、コナンくんですね！
今日は、書いたの４時なので〈皆さんが寝ているかも〉予約提載です♪
とても、一話一話短いかもしれませんね・・・。そこは、ご勘弁を・・・
あと、学校生活がメインではないので、必要最低限の所しか書いてません。
学校生活の話が好きな方は、すみません・・・。

Ｎｅｘｔ　ｃｏｎａｎ'ｓ　Ｈｉｎｔ　（笑）

体の異常

次回もお楽しみに！

―2― 突然の体の異常（前書き）

桔梗です！今、ちょっと時間あったので、更新します！

少し、質問です！

皆さんが、好きなコナンキャラは誰ですか？

答えは、感想の所やメッセージでお願いします（＾＾／／）

ー２ー　突然の体の異常

ー昼　ＰＭ　１２：００ー

給食の時間になり、いつもの給食の時間が始まった。子供達にとっては一番の楽しみだ。

『よっしゃ！一番！』

いつものように、一番に給食を食べ終わるのが元太である。
そして、いつも残し屋さんなのが・・・

『あーっ・・また光彦くん人参残してるー。』

『あとで、食べるんですよぉー』

なんていう、言い合いがしょっちゅうだ。この時、コナンにはある異変があった。
いつもなら、完食するはずの給食がなぜか食べれないのである。
その異変を察知した哀が、
コナンに尋ねた。

『どうしたの？』

哀は、心配そうに聞いた。コナンは、正直な事を言わずに哀に嘘をついた。

「・・へ？・・・いや、ちょっと考え事してただけ・・」

コナンは、そう言い、哀に心配をさせないために無理やり口に給食を詰め込んだ。

哀は、その様子からひっかかる事はあったが自分の給食を食べ進めた。

給食が終わり、掃除も完了し下校の時間となった。

《さようなら！》

子供達は、元気に挨拶をし、少年探偵団達もコナンと哀に声をかけ、一緒に下校した。

のちに、別れる道となり、少年探偵団達とは、明日ねなどと言い合い、別れた。

哀とも、別れてコナンは一人となった。自分の体がとてもだるくなっているのを感じ、

立ち止まった。

「（・・なんだ?なんか、ものすごくだるい・・）」

コナンは、歩けないほどのだるさに自分自身でも訳が分からなかった。

歩こうとしているが、足が動かず、腹痛と眩暈と熱が一気に襲い掛かってきた。

コナンのいる所はちょうど人通りの少ない所だったのか人は、全く通らない。

どんどん症状は悪化し、コナンは、その場に倒れてしまった。

―２―　突然の体の異常（後書き）

コナン君倒れてしまいましたー！どうなるのでしょう・・・
今日は、まだ更新します。しばらくお待ち下さいネ♪

Ｎｅｘｔ　ｃｏｎａｎ'ｓ　Ｈｉｎｔ

意識不明のコナン

次回も、お楽しみに！

―3― 帰ってこない・・・

―ＰＭ　７：００―

さすがに、遅すぎると思いコナンは博士の家にいると思ってコナンに、帰って来てと
コナンに言おうと博士の家に電話をかけた。

〈・・プルルルッ・・ガチャッ！〉

『はい。阿笠ですけど？』

電話に出たのは、哀だった。

「あっ・・哀ちゃん？そっちにコナン君いるでしょ？もう、帰ってきなさいって、
言ってくれないかな？」

蘭は、そう言ったが、哀から予想外の言葉が返ってきた。

『・・え？江戸川君来てないけど？帰って来てないの？』

哀は、蘭に聞き返した。その言葉を聞いた瞬間に蘭は青ざめた。

「・・うそ・・コナン君、博士んちにいると思ったのに・・・」

蘭は、ものすごく焦った声でそう言い放った。
一方で、哀は昼のコナンの様子を思い出し、心の中で考えた。

『（あの時、江戸川君は食欲がなかったように見えた・・あの後
のが全部演技だと
したら・・・）』

哀は、一つの仮説を立てた。元々凄腕の科学者だ。頭の回転は早い。

『分かったわ。私達の方でも探してみるわ。』

「うん・・お願い・・哀ちゃん・・・」

蘭は、泣きながら哀との電話を切った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

哀は、予備の追跡メガネを引き出しから出し、スイッチをつけた。

〈ピコッ・・ピッ！・・ピッ！〉

追跡メガネは、反応した。

『（・・やっぱり、バッジを持っていたわね・・・）』

しばらくすると、博士もトイレから戻ってきた。
哀は、博士に事情を説明し、一緒にコナンを探した。

『・・この辺りだわ・・』

そこは、人一人通らない道だ・・

「新一！ー・・・」

博士は、大声で呼びかける。そして、哀も・・

『・・工藤君ー！！・・』

そして、そこに見つけた二人が見た光景は、とても真っ青だが、あきらかに熱があり
ピクリとも動かないコナンであった。その光景に二人は、驚きを隠せなかった。

「新一！！」

『工藤君！！』

真っ先に、駆け寄ったのは多少医学知識のある哀である。
コナンの脈拍を確認し、コナンに意識確認を施す。

『博士・・救急車・・』

博士は、驚きで最初の哀の声が聞こえなかったが、哀が必死に、

『早くっ！！』

その声には、必死さと助けたいという思いが詰まっていた。その声に反応し、博士は慌てて
１１９番に電話をした。その間に、哀はコナンの病状の確認をし

ていた。その病状は、一刻を
争うものだった。コナンは、呼吸が弱くなっており、熱も触らなくても分かるくらいに、
上がっていた。一番の問題は、気温が低い外に長い時間倒れていたのだ。コナンは、体力を
消耗し、意識を取り戻す気配がない。重病という事で、救急車はコナンを優先しこの場所に
来た。

『・・ボウヤ・・返事出来るかい？』

コナンは哀がやったように救急隊員に意識確認をされ、脈拍を確認されていた。
コナンの様子に一刻を争うと判断し、救急車に乗せられた。のちに、コナンの体には、
心電図モニターと酸素マスクが装着され、哀と、博士も、救急車に乗り込んだ。

・・・ピーポー・・ピーポー・・

救急車は、サイレンを鳴らし緊急のため信号を無視し、病院へ向かう。
そして、米花総合病院に着き、ストレッチャーで早急に運ばれた。

ー米花総合病院ー

『容態は？』

医師が救急隊員に聞いた。

「意識レベル２００、呼吸心拍数が共に弱く、とても危険な状態です。高熱で長時間、外に倒れていたため体力が格段に落ちています。症状の原因が・・・不明です。」

救急隊員は、申し訳なさそうに言った。医師は、救急隊員の言葉に了承し、哀達にここでお待ち下さいと言った後、手術室へコナンを連れて行った。

すぐに、〈手術中〉というランプが点いた。

―３― 帰ってこない・・・（後書き）

徐々に、一話一話が長くなっていきます。（メインの場面に入るので）

今日は、アンコールがあれば、１２時に更新したいと思っています。

どっちになるか分かりませんが・・・

Ｎｅｘｔ ｃｏｎａｎ' ｓ Ｈｉｎｔ

病気の発覚

また、明日。アンコールがあれば、１２時に！では！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4827ba/

難病と向き合ったから、知り得た事・・・

2012年1月13日20時57分発行